

尊光寺報

第130号
令和2年9月

徳島県阿波市市場
町大野島字天神41
尊光寺

供養とは何か

「亡き父の供養をしたいので法事をしたいのですが」
寺に法事を依頼される時によく聞くフレーズです。「供養」という言葉は便利な言葉で、亡き方の供養、法事土産や会食として粗供養、手を合せることも、お経を読むことも供養などと、仏事に関することによく使われています。そこであらためて「供養」の意味を考えてみましょう。

「供養」を、漢字辞書『漢字海』でひきますと、
一 キョウヨウ 衣食の世話をして父母を養う。先祖の霊前に食物をそなえて祭る。

二 クヨウ (仏教用語) 仏や僧あるいはそれを象徴するものに衣食その他を献ずる。礼拝する。

とあります。漢字の成り立ちは、「供」とは、神への供え物を設ける。「養」は、そなえ与えてやしなう「食」から構成とあります。辞書にあるように厳密には読み方によつて意味の区別があるようですが、日常では意識することなく「くよう」と読んで、意味も曖昧に使っているように思われます。

供養とは尊敬をもつて奉仕すること

仏教用語では、古いインドの言葉で「プージャー」、または「プージャーナー」といい、その翻訳にあてたのが「供養」という言葉です。原語は、尊敬すること、奉仕すること、物を供えることを意味しています。

お釈迦様の時代より、三宝供養といつて仏供養(ブツダを供養する)・法供養(ブツダの説いた教えを供養する)・僧供養(ブツダの説いた教えを信奉する仲間を供養する)が説かれ、具体的には食物や衣服などの供え物をささげる行いや僧侶が仏法を説きそれを聞くことが勧められています。

ブツダの呼び名の一つに「阿羅漢(あらかん)」というのがあります。それは「供養を受けるにふさわしい者」という意味で「応供」とも書きます。これを受けて親鸞聖人は、阿弥陀如来のことを和讃に「大応供」と記し、供養を受けるにふさわしい者とは仏のみであるとしています。

追善供養

「亡き方を供養する」という場合、多くの仏教宗派では追善供養を意味しています。仏教は仏に成ることを目指し、修行をして功徳を積んで煩惱を抑えてさとりを得ようと努力します。功徳を積んで歩む道は、険しく遠い道なので、次々と

煩惱が湧き起こつては歩みを邪魔します。生きていこううちに積んだ煩惱が少なくそれよりも煩惱が多い場合、輪廻して次に良い場所に生まれることは難しくなります。そこで亡き方に功徳善根を追つて送るといのが、追善供養という考え方です。「亡き父の供養」という場合、亡き父の冥福を祈つて追善を行いたいと思うのでしよう。

浄土真宗は追善ではありません

浄土真宗ではこの追善供養という考え方はいたしません。それには理由がいくつかあります。まず、追善というからは、こちら側に善なるものがなければ亡き方に送ることはできません。我々の姿を省みると、善なるものが私にはあるのだろうか、煩惱に振り回されて自分に都合の良いものを善とし都合の悪いものを悪としている私が善悪を判断できるのだろうか、亡き方の善よりも良き善がきているのだろうか、と。

仏に願われている私の姿

『歎異抄』には、親鸞聖人の「父母の供養のために念仏を称えたことはない」との言葉が紹介されます。

「南無阿弥陀仏」とは、阿弥陀如来の「必ず救う我にまかせよ、わが名を称えよ、必ず浄土に生まれさせて仏にならせよう」とのよび声です。念仏は阿弥陀如来から私たちに向けられたはたらきであり、自分の力で積み上げた善ではありません。私が亡き方に念仏を追善しようというのであれば、仏さまからの贈り物を、さも自分からの贈り物であるかのように振る舞うようなものでありましよう。

また、先立つた方もお念仏に出会っているのなら、お念仏に抱かれて浄土へ往生し、先に仏となられているはずで、功徳の満ちあふれている仏さまに、煩惱まみれの我々の功徳を追うというのも、また勘違いはなほだしい行いと見えましよう。

仏事・法事は亡き方を縁として仏の慈悲に出会う供養

私たちは亡き方を慕い、手を合せる縁をいただきます。その姿は亡き方に尊敬を表わす供養の姿であります。

お念仏に出会った人生は「南無阿弥陀仏」が一緒に一緒の人生でありました。この世の命の終わるとき、必ず救うとお誓いくださった阿弥陀如来に抱かれて浄土に生まれ仏となり、この世に還り来て私たちを導いてくださっています。先立つ我が命を縁として私が出会った「南無阿弥陀仏」にあなたも出会つてくれよと、仏前へ誘いこの両手を合せようとはたらいてください。

仏事・法事は亡き方が用意してくださった、お念仏に出会う縁です。先立つた方も残された私たちも共に阿弥陀如来のお慈悲に抱かれてこの人生を歩んでいることを聞かせていただきます。これが何よりの供養となるのです。

お彼岸は先立つ方を縁として仏の慈悲に出会う供養

彼岸とは念仏に出遇った方が行き生まれたさとりの浄土をいいます。また、暑さ寒さも彼岸までという言葉のように、暑気も和らぎ心がホッとする時期がお彼岸の頃です。この良き時節に仏さまのお慈悲に耳を傾け、先立つ方のお導きにより、残された私がお念仏に出会わせていただくことこそ、先立つ方の仏としての願いに報いていくこととなるのです。どうぞお彼岸の中(九月二十二日)とその翌日には尊光寺へご参拝ください。

法要・行事のご案内

コロナ対策のため、法要・行事の際はマスクするなど咳エチケットにご協力ください。また消毒液を置いてありますのでご利用いただき、手洗いをこまめに行いましょう。

◎ 秋の彼岸会永代経法要

【9月22日・23日】両日とも午後1時より

※ 9月23日は仏教婦人会による養護老人ホームお接待を予定してありますが、新型コロナウイルスの影響により、お接待は行わず、法話の後お茶といたします。

【法話講師】 赤井智顕 師

(本願寺派布教使・輔教・龍谷大学講師・西宮市善教寺)



副住職の尊敬する先輩僧侶のお一人です。四年以上前からお願いをしております。ようやくお越しただけなことになりました。分かりやすく仏さまのお話をしてくださいますので、どうぞ皆さまの参拝をお待ちしております。

◎ 御正忌報恩講法要

【12月19日】午後1時 法要・法話

午後5時 逮夜法要・法話

【12月20日】午前10時 門徒総永代経法要・法話

午後1時 報恩講御満座法要・法話

【法話講師】 長谷川憲章 師

【執行当番】 麻植組(鴨島・西麻植・神後・山田・川島・学桑村・牛島)です。よろしくお願ひします。

獲信見敬大慶喜 即横超截五悪趣

【訓読】信を獲て見て敬ひ大きに慶喜すれば、すなはち横に五悪趣を超越す。

【現代語訳】信心をいただいで大いによろこび敬う人は、ただちに阿弥陀如来の必ず救うと誓われたその願いの力によつて、六道輪廻への迷いの因が断ち切られる。

前回は、煩惱に眼をさえぎられている我々であっても、阿弥陀如来は必ず救う我にまかせよと一緒してくださいという部分でありました。

今回はそれに続く部分で、大意は「信心をいただいた者は、もはやこの世にふたたび迷いの生を受けることなく、必ず浄土に生まれて仏に成る身に定まるのである」という部分です。

まず「獲信」とあります。「獲」の字は、獲物を捕らえると言うように、こちらからつかみ取るという意味で使われることが一般的には多いですが、ここではそうではありません。佛教の言葉で「獲得」(ぎやくとく)と読む言葉があります。親鸞聖人の用例では「受ける」「受け取る」という意味合いのある語です。同じように「獲信」とは、阿弥陀如来が必ず救う

我にまかせよと喚びかけているそのよび声をそのまま受け取ること、受け入れることを「獲信」といい、「信心をいただく」と表現するのです。つまり自分から仏さまを信じますと表明するのではなく、仏さまの必ず救う我にまかせよとの仰せをそのまま受け入れることが、浄土真宗の信心なのです。

そのような信心をいただいたのであれば、おのずから仏さまを敬う心も起つてくるというのを「見敬」と表現しているのです。

つづく「大慶喜」とは、大いに喜ぶことですが、親鸞聖人は現在すでに得ていることに對する慶びと表現しています。浄土へ往生し仏に成るといふ事態はこの命の終わる未来の話ですが、親鸞聖人はただ未来の浄土往生を喜んでいるのではなく、信心をいただいでいる今を慶んでいるのです。信心をいただくと言うことは、阿弥陀如来の必ず救うと誓われた願いを聞かせていただくことであり、阿弥陀如来がご一緒くださる人生を歩んでいることを知らせていただくことであり、浄土へ生まれ仏に成ることが今すでに決まっているというのを慶んでいるのです。今まさに阿弥陀如来の慈悲の中に抱かれているという安堵感とも言えましよう。

浄土往生が既に決まっていることを今慶ぶというのは、例

えば、学校の入学試験をして合格発表を聞いた後、入学を待つ慶びに近い感覚でしょうか。合格発表を聞くというのが、阿弥陀さまの話で言えば、必ず救うと誓われたその仏さまの願いを聞かせていただくことであり、それを受け入れ信じる時と言えましよう。そして入学するというのは、この娑婆の命尽きて浄土に生まれ仏となる事に当てはまるでしょうか。

入学が決まった後は何をするのか。例えば勉強をやめて遊びに行く人、改めて入学後の準備のためと勉学に励む人、その時期にしかできない何かを始める人と、人それぞれでありましよう。人それぞれで良いのですが、私事を例に挙げますと、合格発表の後、しばらく大学側から音沙汰がなければ、本当に合格しているのだろうかと不安になるときもありました。何度も合格通知を眺めてみたり、入学案内を読み返しては手続きに落ちがないか、心配になったものです。

阿弥陀さまのお救いも同じように、あなたが浄土へ往生することは間違いないですよと、お聞かせいただいで、一度はホッと安堵しても、不安な心はやはりつきまとうものでしょう。そのつど何度も何度も、仏さまのお慈悲を聞かせていただきましよう。今すでにここでの救いにあずかっている、お慈悲の中にいる、それを聞かせていただく場所がお寺であり仏事なのです。

副住職、今年も心のリフォーム講座の講師を務めました

本年も阿波市から依頼をいただき、「心のリフォーム学級」の講演を担当いたしました。7月16日に土成中央公民館、7月30日にアエルワホールにて「仏と仏弟子のブツブツ」と題し、「仏弟子とは何か」をテーマに法名や戒名の話、お釈迦様のお弟子のエピソードを交えながら、仏弟子となる意味についてお話をいたしました。新型コロナウイルスの影響を心配いたしました、多くの方が耳を傾けてくださり、誠に有り難うございました。

今回はコロナの影響で講演日時の確定が遅れ、事前にこの寺報でのお知らせができませんでしたが、また機会がありましたらお知らせをいたします。



副住職担当、徳島新聞カルチャー教室の「案内」

各講座、受講生募集

● 仏教講座「御文章(ごぶんしよう)」

「聖人一流の」。浄土真宗中興の祖、蓮如上人が門信徒へ宛てた手紙が「御文章」です。宗祖、親鸞聖人の念仏の教えをやさしく説かれた「御文章」を、原文に沿って読み解き、仏教とは何か、念仏とは何か、一緒に学んでまいりましよう。

● 毎月第3金曜日 10時～11時半 月額2500円(税別)

【教室・申込先】徳島新聞カルチャーセンター 徳島本校 徳島市川内町平石若宮92-4 TEL 088-665-8500

● 親鸞聖人と「歎異抄(たんにしよう)」

「悪人こそが救われる!」「歎異抄」には昔から多くの人々の心をひきつけてやまない言葉がまつています。人間らしい矛盾を抱えながら生き抜かれた親鸞聖人の言葉を丁寧に読み解きあじわつてまいりましよう。

● 毎月第2月曜日 13時半～15時 月額2500円(税別)

【教室・申込先】教室は、阿波おどり会館内 徳島市寺島本町西1-5-5 徳島店9階 TEL 088-611-3355

令和3年 年忌表

令和3年の法事と亡くなった年
1周忌 令和2・(2020)年
3回忌 平成31(2019)年
7回忌 平成27(2015)年
13回忌 平成21(2009)年
17回忌 平成17(2005)年
25回忌 平成 9(1997)年
33回忌 平成元・昭和64(1989)年
50回忌 昭和47(1972)年
61回忌 昭和36(1961)年
100回忌 大正11(1922)年
150回忌 明治 5(1872)年
200回忌 文政 5(1822)年
250回忌 明和 9・安永元(1772)年
300回忌 享保 7(1722)年
過去帳やお位牌をご覧ください。

令和2年 年忌表

令和2年の法事と亡くなった年
1周忌 平成31・令和元(2019)年
3回忌 平成30(2018)年
7回忌 平成26(2014)年
13回忌 平成20(2008)年
17回忌 平成16(2004)年
25回忌 平成 8(1996)年
33回忌 昭和63(1988)年
50回忌 昭和46(1971)年
61回忌 昭和35(1960)年
100回忌 大正10(1921)年
150回忌 明治 4(1871)年
200回忌 文政 4(1821)年
250回忌 明和 8(1771)年
300回忌 享保 6(1721)年
過去帳やお位牌をご覧ください。

秋の彼岸会永代経法要

九月二十二日（火曜・秋分の日） 二十三日（水曜）

両日とも午後一時より お勤めと法話

※ 二十三日は、仏教婦人会による養護老人ホームお接待を予定していましたが、新型コロナウイルスの影響により会食を行わず、法話後のお茶といたします。どうぞ気軽にお参りください。

法話講師：本願寺派布教使・本願寺派輔教・龍谷大学講師・西宮市善行寺副住職・

元プロ野球森本ひちより似のお坊さん・副住職の尊敬する先輩僧侶

赤井智顕師



赤井先生には四年以上前から依頼をしてようやくお越し頂けることになりました。おだやかな表情でお話ししてくださいませ。ご一緒に仏さまのお慈悲に耳を傾けましょう。

コロナ対策のためにマスクをしてお参りください。本堂には消毒液を置いてますのでご利用ください。本堂はほどよく換気されております。